



TOMO
DACHI

Johnson & Johnson
FAMILY OF COMPANIES IN JAPAN

TOMODACHI
J&J 災害看護研修プログラム
2019



災害看護を、極める

大事なとき、役に立てる人になるために。

「TOMODACHI J&J 災害看護研修プログラム」は、2019年度で5回目の開催となりました。

本プログラムは、日本で学ぶ看護学生が災害時における看護のあり方について考え、次世代を率いていくリーダーシップを身につけることを目的としています。

災害が多い国、日本。だからこそ、有事の際に行動できる人、そして長期的にも防災や減災へ貢献できる人を育てることが、よりよい社会の実現につながると私たちは信じています。

CONTENTS

- 03 TOMODACHIイニシアチブについて
- 05 参加者紹介
- 07 メンター紹介
- 08 基礎から実践までの3ステップ
 - 09 1年間のスケジュール
 - 11 事前研修
 - 13 米国研修
 - 17 事後研修
- 20 プログラム修了後も続く学び
 - 21 参加者のその後
- 23 関係者紹介
- 24 協賛

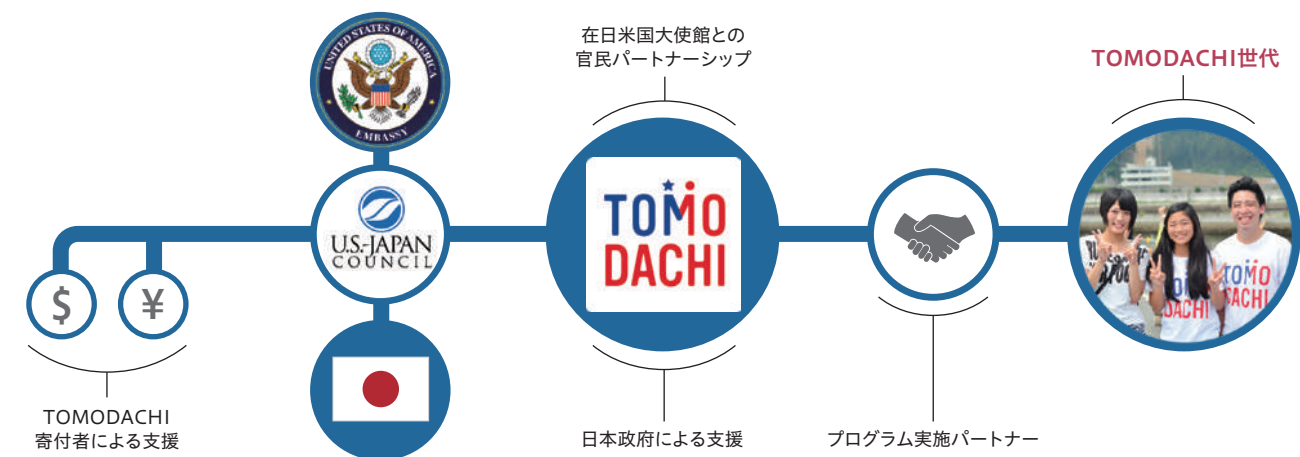
次のリーダーを育成

TOMODACHIイニシアチブについて

TOMODACHIイニシアチブとは、東日本大震災後の日本の復興支援から生まれ、教育、文化交流、リーダーシップといったプログラムを通して、日米の次世代のリーダーの育成を目指す米日カウンシルと在日米国大使館が主導する官民パートナーシップで、日本国政府の支援も受けています。日米関係の強化に深く関わり、互いの文化や国を理解し、より協調的で繁栄した安全な世界への貢献と、そうした世界での成功に必要な、世界中で通用する技能と国際的な視点を備えた日米の若いリーダーである「TOMODACHI世代」の育成を目指しています。

〔TOMODACHI イニシアチブ Webサイト〕 www.tomodachi.org

TOMODACHIイニシアチブ 組織体制と支援



プログラムを支えるのは、確かな実績を持つスタッフ



橋本 彩

プログラムマネージャー
TOMODACHIイニシアチブ

PROFILE

TOMODACHIイニシアチブでプログラムマネージャーとして勤務。高校生、大学生、そしてヤングプロフェッショナルを対象としたTOMODACHIイニシアチブのプログラムを管理、運営している。前職は在日米軍に勤務し、ベストプラクティスと認められたメンタープログラムをはじめ、各種プロジェクトやアイデアを実施・管理していた実績を持つ。また、2011年に在日米軍が行ったトモダチ作戦では、後方支援の調整員として参加。日本と米国の官民両方の組織にて20年勤務し、司令官や社長などのトップマネジメントに直接仕えるポジションを経験しており、現職でも活躍を続けている。恵泉女学園大学人文学部にて学士を取得し、フェニックス大学でMBAを取得。

TOMODACHI J&J 災害看護研修プログラムとは？

東日本大震災では多くの医療機関が被災し、被災住民は深刻な健康の不安にさらされました。この経験から、住民の近くで寄り添う看護従事者の育成・教育が将来の地域復興に大きく貢献すると考え、東北大学で地域医療に携わる菅原準一教授の協力のもと、看護学生の能力育成とリーダーシップの強化を図る教育支援を計画。「TOMODACHI J&J 災害看護研修プログラム」としてスタートしました。災害対策分野での専門知識の深化と次世代を担うリーダーの育成を目的にしており、本年度より参加者を全国から募集することを決定しました。本プログラムは、事前研修・米国研修・事後研修の3つで構成されています。参加者が主体性をもって取り組みながら、アクティビティの企画・運営を通して地域に学びを還元。また、最終報告会では災害看護に関心を寄せる方たちに対して、参加学生たちが本プログラムで学んだことを共有します。プログラム卒業後には、得

られた知識とリーダーシップにより職場で活躍し、地域に貢献することが期待されます。そして次の年の参加者に学びを共有・伝授することで、より学びを深めていくのです。

プログラム開催地

〔事前研修〕 仙台、東京
〔米国研修〕 ニューヨーク、ニュージャージー、ワシントンD.C.
〔事後研修〕 仙台

主催

公益財団法人 米日カウンシルージャパン、
TOMODACHIイニシアチブ

協賛

ジョンソン・エンド・ジョンソン 日本法人グループ

実施運営団体

ローラシアン協会、チルドレンズ・ナショナル・ヘルス・システム

災害看護のエキスパートを目指す学生たち

2019年度の本プログラムには6名が参加。今年は東北地方だけではなく、神奈川県からも「災害看護を学びたい」という熱い想いをを持った学生が集まりました。彼女たちがプログラムへの参加を決めた理由をご紹介します。

ボランティアをきっかけに
住民が行動する大切さを実感



PROFILE

小野 和佳奈さん

国際医療福祉大学大学院
医療福祉学研究科 保健医療学専攻
看護学分野 公衆衛生看護学領域 修士課程1年
神奈川県藤沢市出身

きっかけは、震災以降にボランティアとして被災地を訪問したとき。災害時には行政やその分野に特化した医療従事者のみが対応するだけでは不十分であり、地域住民も行動する必要があると思うようになりました。地域住民・医療従事者が取るべき対応やメンタルヘルスケアなどを学び、自分自身がリーダーシップを発揮できるよう力をつけたいと思い、参加しました。そして、さまざまな人たちとともに災害時の対応について具体的に考えるきっかけを作れるよう学びを深めました。

他者を尊重したうえで
まとめられるリーダーになる



PROFILE

小泉 舞華さん

宮城大学
看護学部 看護学科4年
福島県双葉郡浪江町出身

自分自身の震災の経験を多くの人に伝えることで、東日本大震災の記憶を遠い昔のものとせず、日ごろから災害に備える大切さに気づいてほしいと思っています。本プログラムでは、国内外問わず災害を経験した人々の思いを知ることができます。他者の意見を聞き、気持ちを尊重した上で、自分の意見を率直に伝えて、周囲をまとめられるリーダーシップ能力を養いたいと思いました。そして、さまざまな活動の中で自身の弱さを見つめ、克服し、一人の人間として成長することを意識し、取り組みました。

目標は、防災意識の向上と
被災者の心のケアへの貢献



PROFILE

佐藤 仁美さん

東北大学
医学部保健学科 看護学専攻4年
秋田県湯沢市出身

震災後、さまざまな支援活動に参加する中で、日本ではまだ防災意識が周知されていないことや被災した方の精神的苦痛について知りました。この社会的な問題の解決に貢献したい、そして災害時のメンタルヘルスケアでリーダーシップを取れる保健師になりたいという気持ちが強くなりました。本プログラムでは急性期の対応のみならず、災害関連死の予防や心のケアといった視点から、中長期的なケアについても学べます。帰国後は得た知識をサークルや報告会で共有し、多くの人に災害への関心を持ってもらえるよう尽力しました。

苦しむ人を救うための
看護を学びたい



PROFILE

佐藤 礼香さん

石巻赤十字看護専門学校
看護学科2年
宮城県仙台市出身

東日本大震災発生時には自身の日常生活もままならず、沿岸部に暮らす家族や持病を持つ家族への心配も絶えませんでした。この経験をきっかけに災害対応に関心を持ち、自分に知識や技術があれば苦しむ人たちの力になれると考え、看護の道を目指しました。また、このプログラムを通して、思いや考えを最大限に活かして、災害看護やメンタルヘルスケアを学び、知識や技術を身につけたいと思って参加を決めました。学生や医療者、地域の方々などに対して、プログラムでの学びを共有し、多くの人の力になりたいです。

自分ならではの看護を
見つけるため参加を決意



PROFILE

長尾 晏寿美さん

横浜市立大学大学院
医学研究科 看護学専攻
看護生命科学分野 博士前期課程1年
神奈川県横浜市出身

災害看護の実際を学び、現場で求められる知識やスキルを把握することで、自身の強みを生かした看護への携わり方を考えたいと思いました。また、災害看護の現場では多職種、地域住民、時には言語が異なる人々と協働する必要がある中で、統轄をする人がどのように横断的・縦断的連携を行うのか広い視野で学びたくて、プログラムに参加しました。多種多様な災害の中で起こるさまざまな可能性を知り、看護ニーズを把握し、災害時のコミュニケーションをよりスムーズにする方法を考える7か月となりました。

自衛隊隊員のように
人の役に立つ存在を目指す



PROFILE

藤井 萌々花さん

岩手医科大学
看護学部3年
岩手県釜石市出身

災害時、誰もが悲しみに混乱していた非日常の中で、懸命に支援活動を行っていた自衛隊の姿を目の当たりにしました。そして自分も人の役に立ち元気になりたいと思い、看護職を目指しました。将来は彼らのように、苦しい中でも人々に寄り添い、前を向いていけるよう支える存在でありたいと強く思います。また、自身の学びと経験を活かし、助産師・看護師として大変な時こそサポートができる自分でありたいです。そしてそれらをたくさんの人たちに伝えて岩手に還元するため、プログラムに参加しました。

困ったときの心強い味方

常に学生たちを見守り、悩んだときにはアドバイスをくださる心強い存在、それがメンターの先生方です。
2019年度は3名の「災害看護のプロフェッショナル」がご参加くださり、指導にあたっていただきました。



PROFILE

小松 恵さん

岩手医科大学
看護学部 共通基盤看護学講座 特任講師

15年間の臨床経験の後、1999年渡米。St. Luke's Roosevelt病院の感染管理部門で研修を受け、NGOに就職し、NY州の看護師 (Registered Nurse) 免許を取得。2007年帰国後、東北大学大学院医学研究科に入学、博士課程前期修了。看護職・看護学校教員を経て、2015年から東北大学大学院教育学研究科博士課程後期在学中。2016年より岩手医科大学講師となる。

今年は、本プログラムにとって多くの課題を投げかけた試練の年だったと思います。プログラムの内容が洗練されていくと同時に、震災体験や災害看護に関わるモチベーションが人それぞれ違うことで、参加者と運営側に共通の目的を持つことが難しかったと思います。人も時代も変化していきます。6年目を迎える2020年は本プログラムの発足当時の目的に立ち戻るのか、新たな目的を設定すべきか、方向性を熟慮していく必要性を痛感しています。このプログラムにご協力いただいた多くの方々に感謝します。特にメンターのお二人には、多大なるご支援を頂戴しました。また、参加学生の皆様には、今回の経験をしっかりと振り返り、今後もプロの看護職になるための研鑽を期待します。己の二本足で立ち、現実から逃げることなく対峙し、人の尊厳を守れる人物になってください。お疲れ様でした。



PROFILE

三浦 由紀子さん

東京医療保健大学
東が丘・立川看護学部 看護学科 助教

都内大学病院で看護師として勤務後、国内外の医療機器メーカーでClinical Specialist、学術担当、開発・薬事業務などを経験。現在は東京医療保健大学にて、成人看護学・国際看護学・災害看護学などの指導に当たる傍ら、GOおよびNGOなどで災害支援活動に参加。

第5期のメンターとして参加しました。半年にわたるプログラムでは、自ら考えて自らの言葉や考えを深める力をつけること、自らの力で行動することなど、自主性と自律性を養いリーダーシップを育成することに重点が置かれていました。昨今の学生は、自主性や自律性を身につけるとはどういうことか、どのような態度姿勢が望ましいのかを考える機会が少ない環境にあるため、この研修に参加したメンバーは戸惑いもあったことと思います。保健医療にかかわる社会人として、自主性と自律性とともに協調性と責任感をさらに養い、メンバーシップ、リーダーシップを身につけてくださるよう期待しています。



PROFILE

増野 園恵さん

兵庫県立大学
地域ケア開発研究所 所長・教授

都内大学病院で看護師として勤務後、大学院を修了し看護管理学領域の教員として学部・大学院の教育に携わる。その間、国内外の被災地での調査・支援活動に参加。現在は、兵庫県立大学大学院で災害看護学領域の教育・研究に従事。

本プログラムにメンターとして参加し、充実した有意義な経験をさせていただきました。日米で災害看護に関わる多くの方々に出会い、刺激を受けるとともに、災害時に看護が果たす役割の重要性和災害看護をさらに追究し広めていくことの必要性を強く感じました。また、7か月の研修期間を通して、参加学生一人ひとりが災害看護というテーマに向き合い、リーダーに必要な素養を身につけて成長していく姿を目にすることができました。研修を修了した皆さんが、この研修で学んだことを生かして、それぞれの場で、防災・減災あるいは復興に向けて力を発揮してくれることを期待しています。

いよいよ研修開始

基礎から実践までの3ステップ

プログラムは災害看護の基礎を学ぶ事前研修、最先端の災害看護を体感する米国研修、学びを地域や母校に還元する事後研修の3ステップに分かれます。研修を通して、次世代の災害看護分野を牽引するリーダーに必要なスキルを身につけます。

7か月かけてしっかり学ぶ災害看護

本プログラムは約7か月という長期間にわたって行われました。ここでは、選考会に始まり最終報告会を迎えるまでの流れと、それぞれのステップについて簡単にご紹介します。

選考会

2019年3月30日(土)・31日(日)

プログラムに参加する学生を選考します。今年度は最終的に6名の参加が決まりました。

事前研修

事前研修① 2019年6月8日(土)・9日(日)
事前研修② 2019年7月6日(土)・7日(日)

米国研修の前に日本で災害看護の基礎を学び、アメリカの医療事情を把握するのが事前研修の目的です。参加する学生同士が初めて顔を合わせる機会でもあり、災害看護を学ぶ仲間としてお互いへの理解を深めます。



米国研修

2019年8月4日(日)～16日(金)

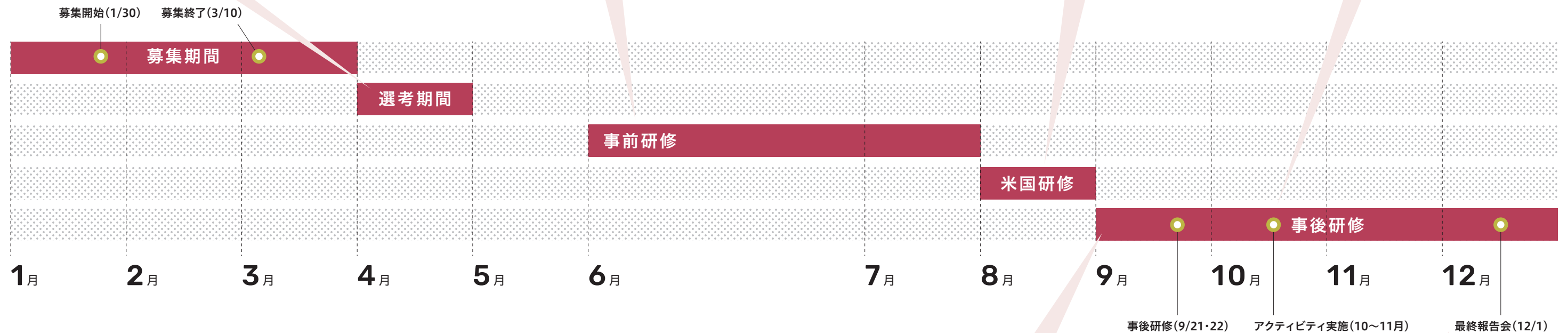
アメリカで最先端の医療や災害看護を学ぶ米国研修。本プログラムのメインといえます。2019年度は13日間で9か所を訪問。実際の医療現場を見学し、災害発生時を想定した訓練を体験。充実した研修となりました。



アクティビティ実施

2019年10月・11月中

ブラッシュアップした企画案を、期間中に各自で実施します。事前準備から当日の運営、開催後のフォローまで学生自身でチャレンジ。アクティビティを行う中で、自らの課題を新たに発見し、さらなる成長につなげます。



Webで学生の生の声を公開しています



1～5期生(2019年度)のプログラム中の様子を更新している「研修レポート(旧:参加者ブログ)」。研修の内容はもちろん、研修中に撮影された活動写真も掲載しています。彼らは何を学び、何を感じたのか。学生たちの生の声をご覧ください。

アクセス方法

下記URLまたは
右記QRコードから
アクセスできます。

TOMODACHI J&J DISASTER
NURSING TRAINING PROGRAM

<https://tjdnt2015.wordpress.com/>



事後研修

2019年9月21日(土)・22日(日)

学びを地域や学校で伝えるためにアクティビティを企画。事後研修では企画案を持ち寄り、メンターや仲間、スタッフなどからフィードバックしてもらいます。受け取ったアドバイスをもとに練り直し、実現を目指します。

最終報告会

準備日: 2019年11月30日(土)
本 番: 2019年12月1日(日)

学生の家族や医療従事者、同じ学校の学生などを招待し、「プログラムを通して学んだこと」をプレゼンテーション。プログラムの締めくくりとして、得てきたスキルをフル活用し今自分が一番伝えたいことを届けます。



アメリカに渡る前の準備段階

事前研修を2回に分けて実施。1回目ではプログラムの目的と全体像を再確認し、各自で目標を立てて学ぶべきことを明確にしました。2回目ではアメリカの医療を学び、スピーチの演習を通して、米国研修の準備を行いました。

VOICE

「選ばれた者として責任を持つ。」プログラムのマネージャーさんがおっしゃった言葉に、背筋が伸びました。学びを自己満足では終わらせず、地域や所属に還元することがプログラム参加者の使命だと噛み締めた瞬間でした。また、災害時には、普段は想像もできないような場面に会います。その過酷な状況の中で最善の行動をするためには、常に自分を「俯瞰」することが重要だと学びました。



小野 和佳奈さん
国際医療福祉大学大学院
医療福祉学専攻 保健医療学専攻
看護学分野 公衆衛生看護学領域
修士課程1年
神奈川県藤沢市出身

個人の目標を設定

プログラムの開始とともに、改めてねらいを把握。その後、看護師という職業やリーダーシップについて、全員で考え議論しました。また、プログラムに参加する意義をより明確にするため、それぞれ「学習目標」と「行動目標」の2つを決めました。なお、本ページ下部には各学生が立てた目標を並べています。



災害看護について講義

東日本大震災から今日まで進化してきた医療の軌跡を学ぶため、東北大学の江川新一先生に日本の災害医療と災害看護についてお話を伺いました。震災当時の各医療機関の動きや現在行われている改革、今本当に必要な支援など、さまざまなテーマで学習。さらに米国研修を見据え、医療英語も交えつつ講義をしていただきました。



現場からみる災害看護

震災発生後に宮城県からの要請を受けて子どもたちの心のケアに従事した、熊本県の養護教諭である濱田知寿子先生にお話を伺いました。当時の様子やその後の活動、医療従事者としての震災への関わり方についてお聞きし、充実した内容となりました。熊本で起きた地震にも触れ、今後必要なケアについて講義していただきました。



アメリカの医療を知る

Children's National Health Systemのエミリーさんとダイアナさんにお話を伺いました。エミリーさんからアメリカの医療と看護について、ダイアナさんからは米国研修で訪問する施設の説明と現地でのボランティア活動について、それぞれお話ししていただきました。現地のスタッフから直接お話を聞くことで、より具体的なイメージをつかむことができました。



スピーチを演習

米国研修中のスピーチ発表に向けて、演習を行いました。各自が事前に原稿を用意し、まずは発表。仲間やスタッフからのフィードバックをもとに文章を練り直し、再度発表を行いました。初めのうちは緊張していたせいか言葉に詰まる学生もいましたが、2回目には全員が落ち着いて話すことができるようになりました。



先輩からのアドバイス

2回の事前研修で、プログラムの卒業生からアドバイスをもらいました。1回目では先輩たちが当時の奮闘や学びを振り返り、実際のスピーチも披露しながらコツを教えてくださいました。2回目は、帰国後に実施するアクティビティに関するアドバイス。企画や運営の段階で苦労した点や実施する際に重視したプロセスについて聞きました。

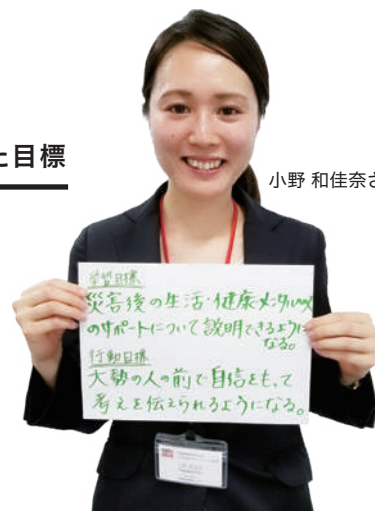


佐藤 礼香さん
石巻赤十字看護専門学校
看護学科2年
宮城県仙台市出身

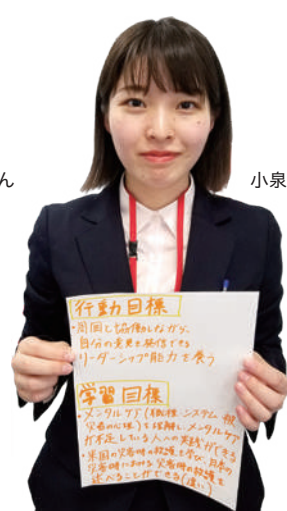
VOICE

スピーチ演習では、自分の思う通りに表現することはできませんでした。緊張のあまり、原稿を読むことに意識が集中してしまったためです。ビデオ撮影したものを確認すると、自分が思っている以上に感情を込めて話す必要があることも気づきました。メンターの先生やスタッフの皆さん、アメリカの看護師の方や先輩からもフィードバックをいただき、多くの学びを得ることができました。

事前研修で決めた目標



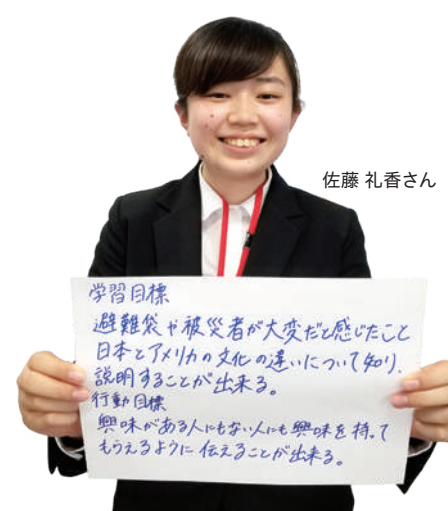
小野 和佳奈さん



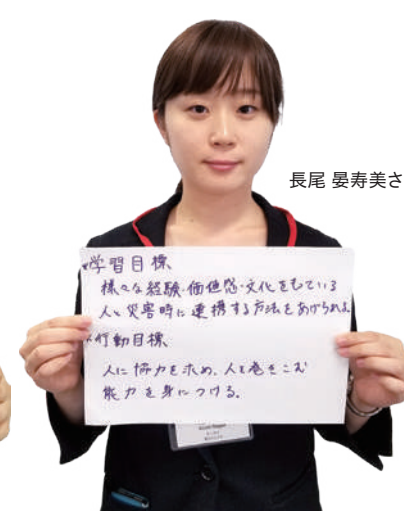
小泉 舞華さん



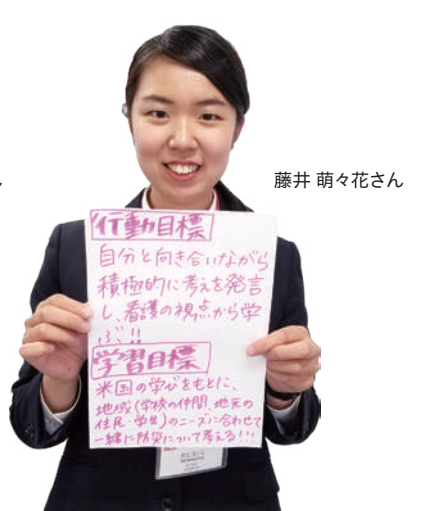
佐藤 仁美さん



佐藤 礼香さん



長尾 晏寿美さん



藤井 萌々花さん

最先端の災害看護を肌で実感

事前研修で知識を得て挑んだ米国研修。見学するだけではなく、実際に訓練を体験できる施設も訪問しました。身をもって最先端の災害看護に触れながら、より具体的に技術を理解することができました。

Start

DAY 1 移動
JAPAN → U.S.A.
ミーティング
観光

9.11の状況を生々しく残す展示物や文献を見学。記憶を風化させず語り継ぐ大切さを学びました。

DAY 3

9/11トリビュート ミュージアム
9/11 Tribute Museum

国立9/11 記念&博物館
National 9/11 Memorial&Museum



ラトガース大学では電車の脱線事故が発生した想定で訓練を体験。J&Jでは本社と博物館を訪問。



DAY 6

ラトガース大学看護学部
Rutgers School of Nursing

ジョンソン・エンド・ジョンソン本社、
同社パワーハウス博物館
Johnson&Johnson Headquarters,
Johnson&Johnson the Powerhouse Museum

Pick UP

DAY 4

NYUランゴーン医療センター
NYU Langone Medical Center

NYUローリー・
マイヤーズ看護大学
NYU Rory Meyers College of Nursing

ハリケーンサンディで病院全体が避難した話を伺いました。看護大学では演習設備などを見学。

ハリケーンサンディの被害を受けた地域に訪問。現在も続く復興支援の取り組みも伺いました。



DAY 5

ニュージャージー州
訪問
Site Visit to New Jersey



DAY 7

移動
NEW JERSEY
→ WASHINGTON, D.C.

EMSシンポジウム
EMS Symposium

チルドレンズ・ナショナル・ヘルス・システム内で
行われた小児救急対応の
院内研修を見学。

最後に再訪問。支援時の
配慮について講義を
聞いた後、非常持ち出し
袋(Go Bag)について
学習。



DAY 13

移動
U.S.A. → JAPAN

Finish

DAY 8

ミーティング
観光



DAY 9

Pick UP

チルドレンズ・ナショナル・
ヘルス・システム
Children's National Health System (Day1)



災害対策とその教育活動に
力を入れる本病院。講義や施設の見学、
訓練など4つの研修を実施。



DAY 10

ジョージタウン
大学
Georgetown University

ワシントンD.C.
消防救急医療サービス・救急消防署
District of Columbia Fire
and Emergency Medical Services(DCFEMS)

DAY 12
Pick UP
チルドレンズ・ナショナル・
ヘルス・システム
Children's National Health System (Day2)



国内外に展開する災害
派遣についてお話を聞
きました。

DAY 11

Pick UP

米国軍健康科学大学
ヴァル G. ヘミング・
シミュレーション・センター
Uniformed Services University of the Health Sciences
Val G. Hemming Simulation Center



ジョージタウン大学では災害時の看護師の役割やセルフケアを学習。DCFEMSでは各種救急車両を見学しました。

U.S. Study Tour

注目ポイントをピックアップ

U.S. Study Tour



ジョンソン・エンド・ジョンソン本社、 同社 パワーハウス博物館

まず本社オフィスでJ&Jが医療と看護にける想いや信念、世界各国で災害が起きた時の支援についてのお話を伺いました。また、長年看護師として勤め、現在J&Jで社員として活躍されている方に「企業で働く看護師の魅力」というテーマでお話していただきました。その後は博物館に移動し、J&Jの成り立ちや発展の歴史、医療への貢献について学習。さらに、昔の医療が非常に過酷な環境下で提供されていたこと、そして現代までに深化していった経緯についても学ぶことができました。

VOICE

小野 和佳奈さん

国際医療福祉大学大学院
医療福祉学研究科 保健医療学専攻 看護学分野
公衆衛生看護学領域 修士課程1年
神奈川県藤沢市出身



「企業で働く看護師の魅力」のお話が印象に残っています。これまでは企業において看護の専門性をどのように発揮できるのか、イメージができませんでした。しかし看護で重要な「クライアント中心」の考え方や、理論的な思考プロセスが企業で生かされると知り、新たな発見になりました。



チルドレンズ・ナショナル・ ヘルス・システム

どんな事態にも対処できるよう、日ごろから病院をあげて訓練やトレーニングを行っている本病院。止血訓練、除染訓練、非常用持出袋に関するワークショップ、机上でのトリアージ訓練、そしてMed Sled®という医療用ソリによる患者避難輸送といった演習にチャレンジしました。実践的・体験型の演習で、自らの課題を認識するきっかけとなりました。また、現職の看護師に同行して院内を見学。実際の仕事風景を見て、看護師の役割やリーダーシップについて改めて学ぶ貴重な経験でした。

VOICE

藤井 萌々花さん

岩手医科大学
看護学部3年
岩手県金石市出身



机上のトリアージ訓練では傷病者が来るたびに頭が真っ白になり、目の前の情報を把握するのので精一杯でした。訓練後、コミュニケーションを取れていなかったと気づきました。周りとの連携するためには、考えや行動を声に出して共有することが大切。私にとって今後の課題になりました。



ワシントンD.C. 消防救急医療サービス・ 救急消防署

現地における緊急時の対応についてお話を伺い、施設内の仮眠室やシャワー室、キッチンなどを見学しました。また、簡単な手術までならその場で可能な救急車両や、簡易ベッドが複数台載せられる搬送車両も見せていただき、メンテナンスの仕方を教わりました。これらの大型車両は、天災・人災を含むさまざまな災害によって生じるマス・カジュアルティ（多数の傷病者が出る状況）を想定したものであり、どんな事態にも対応できるよう日ごろから備えていることを学びました。



米国軍健康科学大学 ヴァル G. ヘミング・シミュレーション・センター

軍の医療関連施設であるため、非常に高性能でリアルなシミュレーター機器や施設を有している本大学。それらを見学し、看護師の地位向上へ尽力した、故ダニエル・K・イノウエ議員についてのお話を伺いました。また、軍による国内外の災害支援や戦時中における輸血と栄養、トリアージに関する講義もありました。支援する側にさまざまな人材・チーム・団体が混在する災害時。いかに効率よく、互いの活動を制限することなくベストを尽くすか、その難しさと厳しさを実感しました。

VOICE

長尾 晏寿美さん

横浜市立大学大学院
医学研究科 看護学専攻 看護生命科学分野
博士前期課程1年
神奈川県横浜市出身



アメリカでは9.11の際に人材派遣制度がなく、MRC(Medical Reserved Corps:医療従事者・元医療従事者が災害時のボランティアに登録する仕組み)を作ったそうです。一方日本では、災害時には公的な団体とボランティア団体が混在します。その中で成果を出すには集団をまとめるリーダーが必要であり、そんな存在になりたいと思いました。

学びを地域や母校に還元

米国研修から帰国した後は、いよいよアクティビティに挑戦です。アメリカで得た学びを地域や母校で広めるため、知恵を振り絞って企画を立案。準備や運営も自分で行うことで、人に伝える難しさと達成感を学びました。



Activity 01



災害時に身を守る方法を2つのワークショップで指導

横浜国立大学看護学科の学生を対象に、「実習病院で災害が発生した場合に取るべき行動」を知るワークショップを行いました。地震発生時に必要な安全確保行動を確認するシェイクアウト訓練、グループに分かれて考える危険予知訓練を行い、助ける側になるためにはまず自分の身を守ることの大切さを伝えました。

VOICE

私は事前研修で「人に協力を求め、人を巻き込む」という行動目標を掲げました。そのため協力者と事前に目的・目標を共有。これが成功につながった要因だと感じています。最後には「アクティビティに参加してよかった」と言っていた達成感がありました。

長尾 晏寿美さん

横浜国立大学大学院
医学研究科 看護学専攻
看護生命科学分野
博士前期課程1年
神奈川県横浜市出身

Activity 02



発災直後の混乱に備え学内でHUGを実施

米国研修での体験を通して、発災前だけでなく、発災直後を想定した備えも必要なのだと学びました。そこで、宮城大学の学生を対象として「災害急性期における避難所運営と避難者の健康問題を学び、知識と経験を今後の災害医療支援へ役立てること」を目的に、HUG（避難所運営ゲーム）を実施しました。

VOICE

当日はとても緊張しました。しかしこれまでの準備やサポーターを信じ、自信をもって取り組みました。準備や集客、運営がスムーズだったわけではありませんが、自分の思いを自分の言葉で伝え、フィードバックをもらえたことは、大きな喜びにつながりました。

小泉 舞華さん

宮城大学
看護学部
看護学科4年
福島県双葉郡浪江町出身

Activity 03



市営住宅に住む方に備えることの大切さを伝える

大和町市営住宅の住民の方を対象に「大和町の防災」についてのイベントを開催。イベントでは大和町で今後災害が起きた時に住民としてすべきことを説明し、備える大切さや準備するものを伝えました。また、自宅でできる経口補水液の作り方、皿の作り方などを伝えました。

VOICE

イベントは住民同士で情報共有をする場にもなりました。例えば備えるものの中には懐中電灯がありましたが、ある方は「アロマのキャンドルがいいよ」と教えてくれました。私の説明を紙やノートにメモする方も多く、このイベントが防災行動のきっかけになれば嬉しいです。

佐藤 仁美さん

東北大学
医学部保健学科
看護学専攻4年
秋田県湯沢市出身



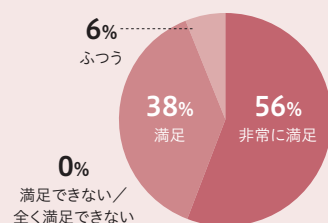
①② 代表の学生による発表 ③ 小松先生のお話 ④ 参加者紹介 ⑤ 参加者、関係者全員での集合写真 ⑥ 仲間の発表を真剣に聞く様子 ⑦ J&J 伊藤佐和様より ⑧ 報告会後の懇親会の様子

最終報告会

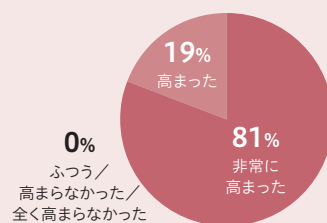
プログラムの総まとめとなるイベント。学校の先生方や本プログラムに興味がある学生にお越しいただきました。初めにプログラム全体の概要を紹介し、その後、研修で得られた学びや気づきをプレゼンテーションにまとめて発表しました。

来場者アンケート

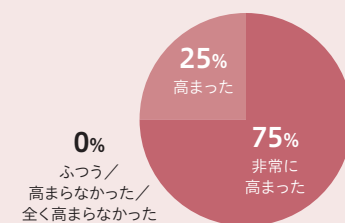
Q 本報告会に参加しての満足度



Q 災害医療・災害看護への興味・関心は高まりましたか



Q 本プログラムへの興味・関心は高まりましたか



発表を聞いて、私もプログラムに参加し、防災について日本在住の外国人や留学生にも伝えたいと感じました。
— 学生

アメリカでの医療を知ることで、自分の中の医療の見方が変わると思いました。
— 福島県立医科大学 学生

プログラムの参加者だけでなく、多くの支援者が一つになって取り組んでいる事を強く感じました。
— 岩手医科大学 学生

プログラムへの関心がすごく高まりました。みなさんの学びや色々なことを聞けて、充実した時間でした。
— 青森県立保健大学 学生

自分とは異なる人と自分を大切に、一緒に行動していく協働する力を高めるプログラムであると学びました。
— 宮城大学 教授

本校のカリキュラム等を再考する際の手立てになり得る部分もたくさんあったので、とても良かったです。
— 石巻赤十字看護専門学校 副学校長

この研修は災害に関する知識の向上だけでなく、社会人になっても活かせる技術を学べる研修だと思いました。
— アラムナイ(プログラム卒業生) 1期生

震災の時どんな行動をするべきか、考えさせられる時間でした。参加者の発表は非常にすばしかったです。
— J&J 社員

※コメント一部抜粋

本番はここから

プログラム修了後も続く学び

次世代を率いるリーダーとして活躍するには、学び続けることが大切。参加学生たちが学んだことを存分に生かし、日本の災害看護を導く。それが私たちの願いです。ここからは、プログラムを修了したアラムナイの活動についてご紹介します。



参加者のその後

アラムナイとして引き続き活動

プログラムが修了した参加者のことを、TOMODACHIイニシアチブでは「アラムナイ」と呼んでいます。アラムナイとなった後も、企画イベントやアラムナイ向けプログラムなど、学び続けられる環境を提供しています。

EVENT アラムナイ企画イベントを開催し、現在の活動を報告

「災害看護とあなたの未来～あなたのライフゴールは何ですか～」をテーマに、ゲスト講演やパネルディスカッション、アラムナイのその後の活動報告を行いました。当日は災害時の対応・災害医療にご興味のある方、また本プログラムに興味をお持ちの方など多くの方にお越しいただき、アラムナイ6名が運営者として参加しました。

イベント概要

災害看護とあなたの未来
～あなたのライフゴールは何ですか～

日時 2019年3月3日(日) 13時～

会場 ジョンソン・エンド・ジョンソン本社



発災から復興期、
定住期を見すえた支援が
必要だと気づきました。

ー1期生 佐藤美輝子さん

保健師になるという目標が
具体化しました。

ー3期生 大宮薫さん

リーダーシップには
いろいろな形がある
ということがわかりました。

ー4期生 松野下彩さん

INTERVIEW

アラムナイに聞きました！

“プログラム卒業後、
どのような
変化がありましたか？”

将来の目標が明確化。
子どもたちのために
支援していきたいです。

ー2期生 佐々木ちはるさん

勤務先で防災係と話し合い、
所属部署での防災について
考えています。

ー2期生 石川理那さん

自分の被災体験と
向き合うことができるよう
になりました。

ー4期生 曳地葉さん

地域の防災のための
サークルを設立しました。

ー4期生 松野ひかるさん

災害看護への興味が増し、
論文を読んだり
授業で議論しました。

ー3期生 嶋原菜穂さん

関係者紹介

お世話になった皆様

江川 新一教授

東北大学 災害科学国際研究所
災害医療国際協力学分野 教授

濱田 知寿子様

熊本県 養護教諭

運営協力団体

チルドレンズ・ナショナル・ヘルス・システム

チルドレンズ・ナショナル・ヘルス・システムは1870年の設立より、ワシントンD.C.を拠点に全米の子どもたちに医療ケアを提供しています。シェイク・ザード・キャンパス(高度小児医療)では、313床のベッドを有する急患治療病院のほか、3州を跨ぎ活躍する小児外傷センター、そして各種輸送手段を駆使した

救命救急搬送プログラムなどを有します。全米でもさまざまな企業や団体より最優良病院として多くの表彰や認定を受け、小児医療におけるその専門技術とイノベーション、また地域から国レベルでの権利擁護を通して子どもたちのために先立つ代弁者としての姿勢が支持されています。

STAFF	 John Walsh Outreach Coordinator, Cardiology	 Sarah Birch, DNP, APRN, CPNP-PC Director, Advanced Practice Nursing (Children's National Health System) Assistant Professor of Pediatrics (The George Washington School of Medicine and Health Sciences Center) Adjunct Faculty (The Johns Hopkins School of Nursing)
	 Emily Dorosz, MSN, RN, CPN, CPEN Clinical Program Coordinator EMS/Base Station Emergency Medicine & Trauma Center	 Diana Fox, RN, BSN, CPN, NHDP-BC Emergency Medicine and Trauma Center
基本情報	所在地 111 Michigan Ave NW, Washington, DC 20010 U.S.A. 連絡先 +1-202-476-5000 設立 1870年 事業内容 小児専門総合病院	

ローラシアン協会

ローラシアン協会は非営利団体として1990年に米国イリノイ州にて設立されました。さまざまな世代を対象とし、年間およそ総計2000人の参加者を誇る日米間の多種多様な派遣・招聘プログラム事業を行っています。2015年には70ヶ国を超える国からの米国留学を専門とする非営利教育団体PAX - Program of

Academic Exchangeに統合され、現在はPAX Laurasian Exchangeという団体名で、日々変化する世界を自身の肌で感じ、経験する機会を提供しております。日本事務局はローラシアン協会として運営しており、2016年度より本プログラムの運営事務局を担当しています。

STAFF	 日高 夢 プログラムディレクター	 庄寄 由紀 プログラムマネージャー
基本情報	所在地 〒153-0064 東京都目黒区下目黒5-5-17 連絡先 03-3712-6176 設立 1990年 事業内容 日米間の派遣・招聘プログラムの運営	

協賛



ジョンソン・エンド・ジョンソン 日本法人グループ*

トータルヘルスケアカンパニーとして負うべき責任

私たちジョンソン・エンド・ジョンソンは、健康こそが豊かな人生の基盤であり、地域社会の繁栄と、発展を促す原動力であると考えています。130年を超える長きにわたり、私たちはすべての世代のライフステージに応じて、人々の健康を支えてきま

した。世界中の人々の健康に非常に大きな責任を負っているジョンソン・エンド・ジョンソンは、「我が信条 (Our Credo)」の理念にもとづき、ビジネスを実践し、社会貢献を通じて地域社会に対する責任を果たせるよう努めています。

東日本大震災からの復興支援について

当社は長期的な視点で、時間とともに変化する被災地のニーズを把握し、その時々が必要とされる支援に取り組んできました。その取り組みは、当社が提供する医療機器等の製品を被災地へ届けるための物流確保やがれきの撤去作業等から始まり、岩手県大槌町の仮設診療所建設、さらに福島県での子育てママと赤ちゃん支援プログラムや子どもの発育・発達プログラム等

にも及びます。震災後の復旧プロセスは終了しても、復興へのプロセスはまさに進行中。今、どのような支援が必要とされているのか、未来に向けてどのような取り組みができるのかを考え、今後も、ジョンソン・エンド・ジョンソンだからこそできる支援に取り組んでいきたいと考えています。

STAFF	 伊藤 佐和 JAPAN COMMUNITY IMPACT マネジャー PROFILE 2004年、ジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社に入社。経理財務本部長秘書として10年間勤務し、社会貢献委員会の活動にも従事。2014年7月から専任者として、同委員会のマネジャーに着任。特に女性・子ども・東北復興支援において、非営利団体のプロジェクトをサポートする。また、「買うボラ(東北のNPOなどが提供する商品を買うことで支援する)」や「社内のチームビルディングにもつながるプログラム設計」など、“できる人が、できる時に、できる事を”をモットーに、社員が楽しんで活動に参加できる環境づくりに取り組んでいる。
SUPPORT MEMBER	 坪井 圭子  井田 一宏
基本情報	所在地 〒101-0065 東京都千代田区西神田3丁目5番2号 連絡先 03-4411-7200(メディカル カンパニー 代表) 設立 1978年 事業内容 総合医療・健康関連用品の輸入・製造販売

* ジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社(コンシューマー カンパニー、メディカル カンパニー、ビジョンケア カンパニー)、ヤンセンファーマ株式会社で構成。



その熱意に、応えたい

世の中、そして未来を変えていく看護師として。

プログラムへの参加を希望する学生に多いのが、
「震災の時に何もできなかったのが悔しい。
だから災害に対する知識やスキルを学びたいと思った」
という理由。私たちはこれからも、
災害看護を学びたい学生のためにその機会を提供し続けます。

TOMODACHI J&J 災害看護研修プログラム 2019

